

# 広がる「PISA型」教育

## 「疑問出しっぱなし」議論深める

6日に結果が発表された国際的な学習到達度調査(PISA)は、思考力、判断力、表現力といった「応用力」をはかる指標だ。教育現場でも、こうした「PISA型」の力を身につけようという取り組みが広がりつつある。

▼1面参照



理科の授業で、ゴムの太さを変えて、ゴムカーが走る距離を測る児童たち  
大阪府中央区の中大江小学校

「生きるための知識と技能」——。国立教育政策研究所はPISAが測る学力をこう位置づける。大阪府中央区の市立中大江小学校では、そんな力を重視した授業に取り組み。

1日、3年生は理科の授業でエネルギーについて学んでいた。「風とゴムの働き」と題し、これまでの授業で児童たちは話し合い、「どんな帆をつけると遠くまで走れるのかな」など六つの疑問をまとめていた。

この日は、疑問の一つ「ゴムの太さを変えると、ゴムカーはどのように走るかな」を、実験して謎を解いた。3種類の太さのゴムを順番にゴムカーにひっかけて「発車」させ、進んだ距離を測定。「細いゴムは2・5センチ、中くらいは5センチ、太いのは9センチ」などの結論を出した。星野君(9)は「もっと太いゴムならどんな走り方をするんだろう」。

担任の有本淳教諭(47)は「課題発見にじっくり時間をかけることが大切。疑問は出しっぱなしにさせ、他の子に『なんでやねん』と突っ込ませて議論を深めるのが大事なんです」と話す。

同小では2013年度から、学習指導要領上は小学3年からの理科授業を小学1年から行う。市教委は

### スピーチ・討論 自主性育む

中高一貫校の東京都立桜修館中等教育学校(東京都目黒区)では「国語で論理を学ぶ」と銘打った独自の授業に取り組み。人の話や文章を正確に理解し、自分の考えを論理的に表現する力を育てるのが目的。教科書は使わず意見文の作成やスピーチ、討論に力を入れる。

PISAは読解力を「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、書

「知識や技能を活用しながら自ら学び自ら考えて課題を解決していく力」などが大切とし、児童たちが苦手意識を持ちがちな理科教育の充実を掲げ、中大江小学校は市のモデル校に指定された。

高井正道校長(61)は、「社会に出たら、正解のない課題に直面することが多い。その時に問題を解決する力が着実に身につけているという手応えがある」と話す。

かかれたテキストを理解し、利用し、熟考し、これに取り組み」と定義しており、同校の授業と重なる。今回のPISAでは、日本の読解力の点数が下がった。担当の榊原美輝教諭(56)は「PISA型の読解力を伸ばすには、板書をノートに写させるだけの授業を脱し、生徒の自主的な学びを育てることがカギではないか」とみる。

(小河雅臣、杉山麻里子)